松浦市文化財調査報告書　第４集

小嶋古墳群

1988

長　崎　県
松浦市教育委員会

題　字

松浦市教育長　呼　子　俊　一

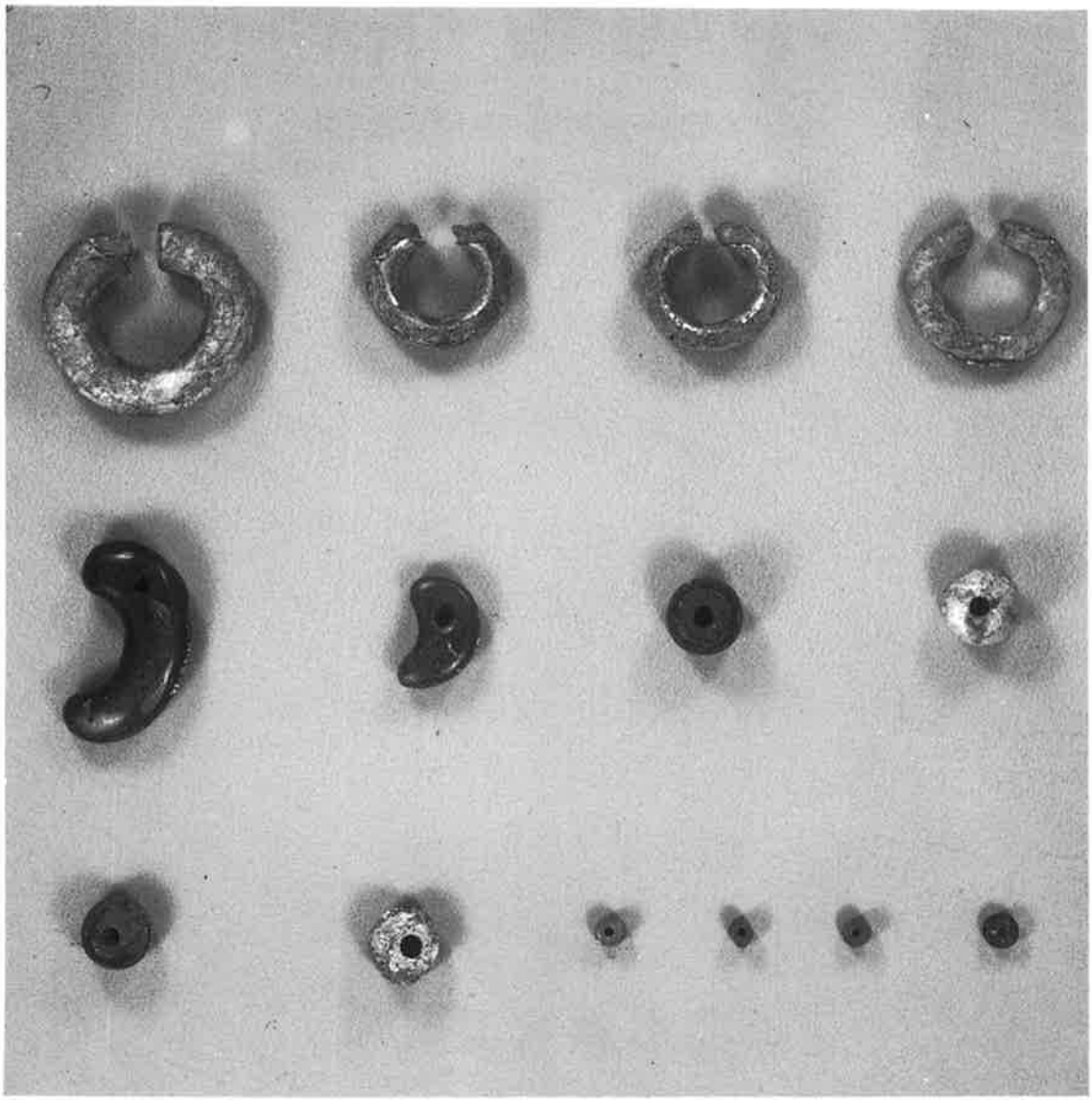
松浦市文化財調査報告書 第４集

小嶋古墳群

長崎県松浦市御厨町所在の古墳群

1988

長　崎　県
松浦市教育委員会



発刊にあたって

このたび、昭和62年度の国庫・県費補助を受けて実施した、松浦市御厨町小嶋古墳群の範囲確認調査報告書を刊行することになりました。

小嶋古墳群は、今日までその存在が知られていた遺跡で、このような古墳群から銀製の耳飾り、碧玉製勾玉等のような貴重な遺物が出土しようとは、一同驚き入っている次第です。

そもそもこの松浦市には、古代遺跡が多くあり、祖先の脈々たる営みを今日に伝えております。また、古代史に関連した地名も残っており、本市の歴史の深さを物語っています。

このたびの発掘調査により、我々の祖先の歴史が日本の歴史の舞台にまで引き上げられたことは現在に生きる我々にとっても誇りであり、今さらながら我々の子孫に先人の文化を伝えていくことがいかに大切なものであるかを考えさせられております。

本書を作成するまでには、多くの方々の御協力を得ておりますが、特に県文化課には深くお礼を申し上げます。また、発掘作業に携わっていただいた地元の方々に対しまして、深く感謝申し上げますとともに、本書がひろく古墳群の重要性を理解していただく資料および郷土史を解明する貴重な資料として少しでも役立てば幸いに存じます。

昭和63年３月

松浦市教育委員会
教育長　呼　子　俊　一

例　言

1．　本書は、昭和62年度に実施した松浦市御厨町大崎免に所在する小嶋古墳群の範囲確認調査報告書である。
2．　調査は、国庫・県費の補助を受けて松浦市教育委員会がこれを実施した。
3．　調査は、松浦市教育委員会社会教育課指導係が実施し、調査員は社会教育課指導係主事の中田敦之があたった。
4．　本書の執筆、編集は中田があたり、松永裕樹子が協力した。
5．　調査によって出土した遺物は、松浦市教育委員会が保管の任にあたっている。
6．　本書には、昭和61年10月に調査した小嶋遺跡の出土遺物の一部も併せて掲載した。
7．　本書は、松浦市文化財調査報告書第４集にあたる。

本　文　目　次

I　はじめに …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
II　遺跡の概要 …… 2～7
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2～5
　3．調査の内容 …… 6
III　遺　構 …… 8～10
　1．1号墳 …… 8
　2．2号墳・3号墳 …… 8
　3．その他 …… 8
IV　遺　物 …… 11～19
　1．1号墳遺物出土状況 …… 11
　2．出土遺物 …… 11
　3．表面採集資料 …… 14～19
V　小　結 …… 20

表　目　次

Tab. 1　松浦市西部地区遺跡一覧表 …… 5
Tab. 2　1号墳出土装身具計測表 …… 16

挿　図　目　次

Fig. 1　松浦市位置図
Fig. 2　松浦市西部地区遺跡分布図 ($\frac{1}{25,000}$) …… 4
Fig. 3　小嶋古墳群位置図 ($\frac{1}{5,000}$) …… 6
Fig. 4　周辺地形測量図($\frac{1}{600}$) …… 7
Fig. 5　1号墳石室実測図 ($\frac{1}{40}$) …… 9～10
Fig. 6　1号墳遺物出土状況 ($\frac{1}{80}$) …… 11
Fig. 7　1号墳出土遺物 ($\frac{2}{3}$) …… 12
Fig. 8　1号墳出土遺物 ($\frac{1}{2}$、$\frac{2}{3}$) …… 13
Fig. 9　表面採集遺物 ($\frac{1}{3}$) …… 17
Fig. 10　表面採集遺物 ($\frac{1}{2}$) …… 18

Fig. 11　表面採集遺物 $\left(\frac{2}{3}\right)$ …… 19

図　版　目　次

PL. 1　小嶋古墳群遠景(南より) …… 23
PL. 2　小嶋古墳群近景 …… 23
PL. 3　1号墳玄室敷石状況 …… 24
PL. 4　1号墳石室全景(南西より) …… 24
PL. 5　1号墳石室奥壁 …… 25
PL. 6　1号墳羨道 …… 25
PL. 7　1号墳玄室内遺物出土状況 …… 26
PL. 8　1号墳玄室内遺物出土状況 …… 26
PL. 9　2号墳全景(東より) …… 27
PL. 10　2号墳全景(南より) …… 27
PL. 11　3号墳全景(東より) …… 27
PL. 12　支石墓(？)全景 …… 28
PL. 13　葺石状況 …… 28
PL. 14　板碑 …… 28
PL. 15　板碑 …… 29
PL. 16　板碑 …… 29
PL. 17　遺物出土状況 …… 29
PL. 18　1号墳出土遺物 $\left(\frac{1}{1}\right)$ …… 30
PL. 19　1号墳出土遺物 $\left(\frac{1}{1}\right)$ …… 31
PL. 20　1号墳出土遺物 $\left(\frac{1}{2}\right)$ …… 32
PL. 21　表面採集遺物 $\left(\frac{1}{3}\right)$ …… 33
PL. 22　表面採集遺物 $\left(\frac{1}{1}\right)$ …… 34
PL. 23　小嶋遺跡出土土器 …… 35
PL. 24　小嶋遺跡出土土器 …… 35
PL. 25　小嶋遺跡出土土器 …… 35
PL. 26　小嶋遺跡出土石器 …… 36
PL. 27　小嶋遺跡出土石器 …… 36
PL. 28　小嶋遺跡出土須恵器 …… 36
PL. 29　調査風景 …… 37
PL. 30　調査風景 …… 37

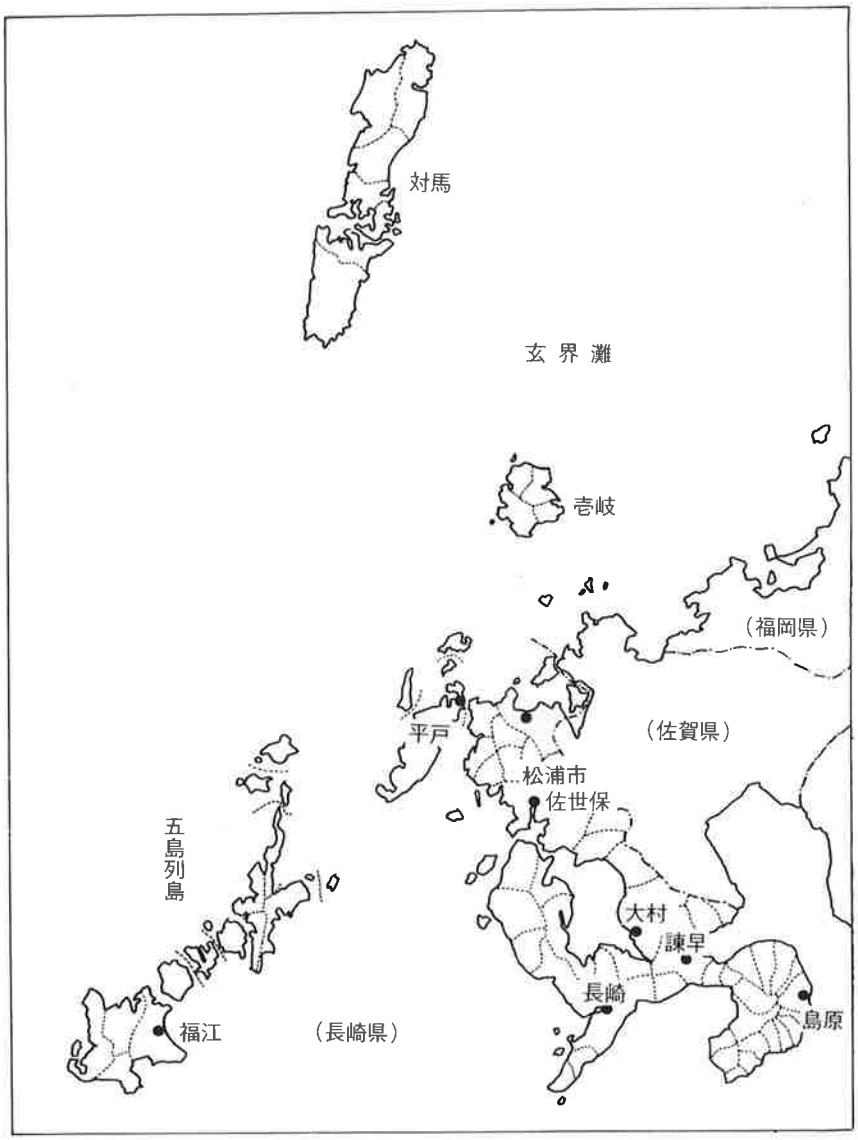


Fig. 1　松浦市位置図

Ⅰ はじめに

1．発掘調査に至る経過

小嶋古墳群は、長崎県松浦市御厨町字小嶋に所在している。遺跡の周辺地域は、かつては玄界灘に面した小嶋で、標高６ｍの海岸部に位置する島であった。江戸時代の天保14年（1843）に干拓が行われ、現在は小嶋新田の最奥部に残る丘になっている。昭和61年10月この一帯をふくめ市西部地区に簡易水道敷設工事が計画され、工事での排土4500m³を遺跡の南側周辺に埋土したいと大崎地区より要望があった。埋土地域には庚申塔・観音供養塔があり、移築して保存したいが移築先を発掘調査してくれないかとのことであり、協議の結果、急遽予算化し、昭和61年10月15日より10月21日まで緊急発掘調査を実施した。その後、同地区より遺跡周辺を史跡公園として整備できないかとの要望があり、本市としても国道沿いでもあり、夏場の海水浴場の利用者も多いので、史跡公園としては好条件であると判断し、計画を進めた。そこで、昭和63年度以降の史跡公園計画のための基礎資料を得るために、遺構の概況把握を主目的に範囲確認調査を計画した。その後、昭和61年度に文化庁の補助金交付を申請し、昭和62年度に承認を受けたので、昭和62年６月16日から７月１日にかけて発掘調査を実施した。

2．調査の組織

１．調査主体　　松浦市教育委員会

２．調査総括　　松浦市教育長　呼子　俊一

３．調査担当　　社会教育課指導係

　　主事　中田　敦之

４．調査指導　　長崎県教育委員会

５．発掘調査参加者

　　松田一郎・大久保ヌイ・大野シオミ・大野ユキ子・小浦良子・泊妙子・中川サエ子・引地シモ・前田イネ子・山口ジツエ・山崎シモ

６．事 務 局　　事務局長

　　社会教育課長　福本　政二　（前任）

　　尾野　伊十郎

　　事務局員

　　社会教育課次長兼指導係長

　　橋口　　達　（前任）

　　宮本　正志

　　社会教育課指導係

　　主事　中田　敦之

II　遺跡の概要

1．地理的環境

小嶋古墳群は、松浦市御厨町大崎免字小嶋又908番地に所在している。松浦市は、北松浦半島の北部とその沖に浮かぶいくつかの島々から構成されている。北に伊万里湾、西から南にかけては北松浦郡田平町、江迎町、世知原町と、東には佐賀県伊万里市と接している。北松浦半島は、長崎・佐賀の県境を占拠する国見山（777m）を最高峰とし、北と西とに高度を逓減しながら海へ没している。地勢は、基盤となる第三紀層とその上部を玄武岩が覆い、いたる所に玄武岩台地を形成している。松浦市の地形は、南高北低をなし、玄武岩による台地、第三紀層の堆積岩による緩やかな丘陵状の山麓とわずかな低平地とにわかれている。小起状の山地の面積が広く、川や海岸沿いに細長い平地があるのみである。玄武岩台地は、高位、中位、低位の3段の台地よりなっており、低位の玄武岩台地が御厨町から田平町・星鹿半島にかけてみられる。海岸線は、比較的出入りが多く、河川は全て北流し、北西からの風波をさけることのできる天然の良港をもっている。

遺跡の立地する御厨町は、市の西部にあり、低位の溶岸台地が広く分布しており、竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた丘陵状となっている。星鹿半島もこれにつづく低い台地で城山山頂にも玄武岩が堆積している。中央部を流れる竜尾川は、木場川・田代川の支流を集めて、御厨の低位台地を刻んで北流している。合流部にはやや広い盆地状の平地をつくっており、江口にはラッパ状に開いた三角江をつくっている。他と比べて水田化も進んでいる。

古墳群は、海岸部に位置するかつての小島の頂部にあり、島は現在小嶋新田の最奥部に残る小丘となっている。周囲は現在埋め立てられ圃場整備も実施されており、古墳群をめぐる環境は一変している。調査に入る前までは、木々が鬱蒼と茂っていた。島の最頂部には薬師堂が建立されており、地区住民のあつい信仰の対象となっている。

2．歴史的環境

自然の幸にめぐまれた御厨町は、かなりの昔から、しかも連綿として絶えることのない人々の遺跡が残っている。現在までのところ、旧石器時代の所産であるナイフ形石器の資料が、水尻B、田口高野遺跡などで確認されている。縄文時代では、前期・中期の小嶋遺跡があげられる。弥生時代では池田遺跡があげられる。この池田遺跡からは縄文後期土器片、および中世期の白磁、青磁、滑石製石鍋も採集されているが、中心となるのは弥生時代で、箱式石棺墓、合口甕棺墓が検出されており、市内でも後漢鏡が出土した志佐町栢ノ木遺跡とともに県下でも代表的な遺跡である。古墳時代では須恵器片等は採集されておらず、市内でも唯一の小嶋古墳群があるのみである。古墳時代以降で重要なのは「宇野御厨」の痕跡であろう。「御厨」は古くは「三栗野」「御厨屋」とも書かれているが「御厨」は皇室・神社などに魚貝・果物などの御

贄を貢上する所領の「みくりや」に由来し、西松浦郡、南松浦郡、北松浦郡を含む広い地域に及ぶ「宇野御厨荘」の一部であった。「宇野御厨」が初めて文書に現われるのは、『東南院文書』で、寛治3年（1089）からのことである。「宇野御厨荘」という語の初見は、『青方文書』の承元2年（1208）尋覚譲状案で、所領を嫡男に譲り渡す証文の案文である。『河上神社文書』の正応5年（1292）の「造河上宮用途支配惣田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」とある。この頃より今日につながる「御厨」の地名があったことが推定される。御厨荘には、荘務管理の機構として執行職、預所職、検非違使、公文職、惣追捕使などが置かれていたが、使・職の権限、内容などについては不明である。御厨荘を中心とする勢力は松浦氏で、『松浦家世伝』によると、源久が延久元年（1069）に摂津国渡辺荘から下向し、肥前国下松浦郡志佐郷今福に上陸し、「宇野御厨使検校幷検非違使」となったとある。源久の後は長子直が嫡子となり所領を譲り受けている。

御厨氏の始祖は源直より2代後の値嘉十郎連の子並からとされ、代々御厨を姓としており、御厨城を居城としていた。

南北朝から室町期にかけては松浦氏一族間で一揆が結ばれており、地域支配の体制を強化している。永徳4年（1384）の『山代文書』下松浦一族一揆契諾状には、「ミくりや三河守守」「ミくりやのさかもと源宥」の当地を本拠とする土豪名が見える。同じ年の『青方文書』には同一人物の「ミくりや参川守守」の名が見える。さらに嘉慶2年（1388）の『青方文書』一揆契諾状には「御厨三河守守」、「御厨田代近」の名が見える。

室町期に入ると、御厨氏は、盛んに朝鮮貿易を行っている。『李朝実録』には「下松浦三河守融」「下松浦三栗野太守源満」などの名が見え、応永15年（1408）から永正元年（1504）までの約100年間朝鮮貿易を行っている。

戦国期に入ってから平戸松浦氏弘定は、松浦氏一族の惣領である相神浦松浦政を明応7年（1498）大智庵城に討ち、平戸松浦隆信は永禄6年（1563）に松浦親を飯盛城に攻めてこれを滅ぼし、ここに平戸松浦氏は一族間における主導権を獲得し、戦国大名としての基礎を固めている。

戦国末期、豊臣秀吉の島津氏討伐という中央の公儀権力による統一運動に際し、松浦鎮信は一族を統合しいち早く秀吉の陣営に参加した。鎮信はその功により、これまで武力で獲得した全領土をあらためて平戸藩領として認められ、中世以来の旧領が安堵されている。

江戸期に入ると、御厨は平戸藩領の田代筋の14ヶ村（田平里、小手田、下寺、御厨里、大崎、田代、星鹿、佐々里、市瀬、小佐々、吉井、福井、鹿町、猪調）の内に属していた。代官所を大崎村に、庄屋を御厨里、大崎、田代、星鹿にそれぞれ置かれている。

天保14年（1843）田代村前田平次郎は3ケ年を要して小嶋新田4町歩を完成させている。小嶋の薬師堂横にはこの功績をたたえた記念碑が昭和34年に建立されている。

近年まで旧歴の7月16日には、この小嶋で素人相撲が催されていたようである。力自慢の力

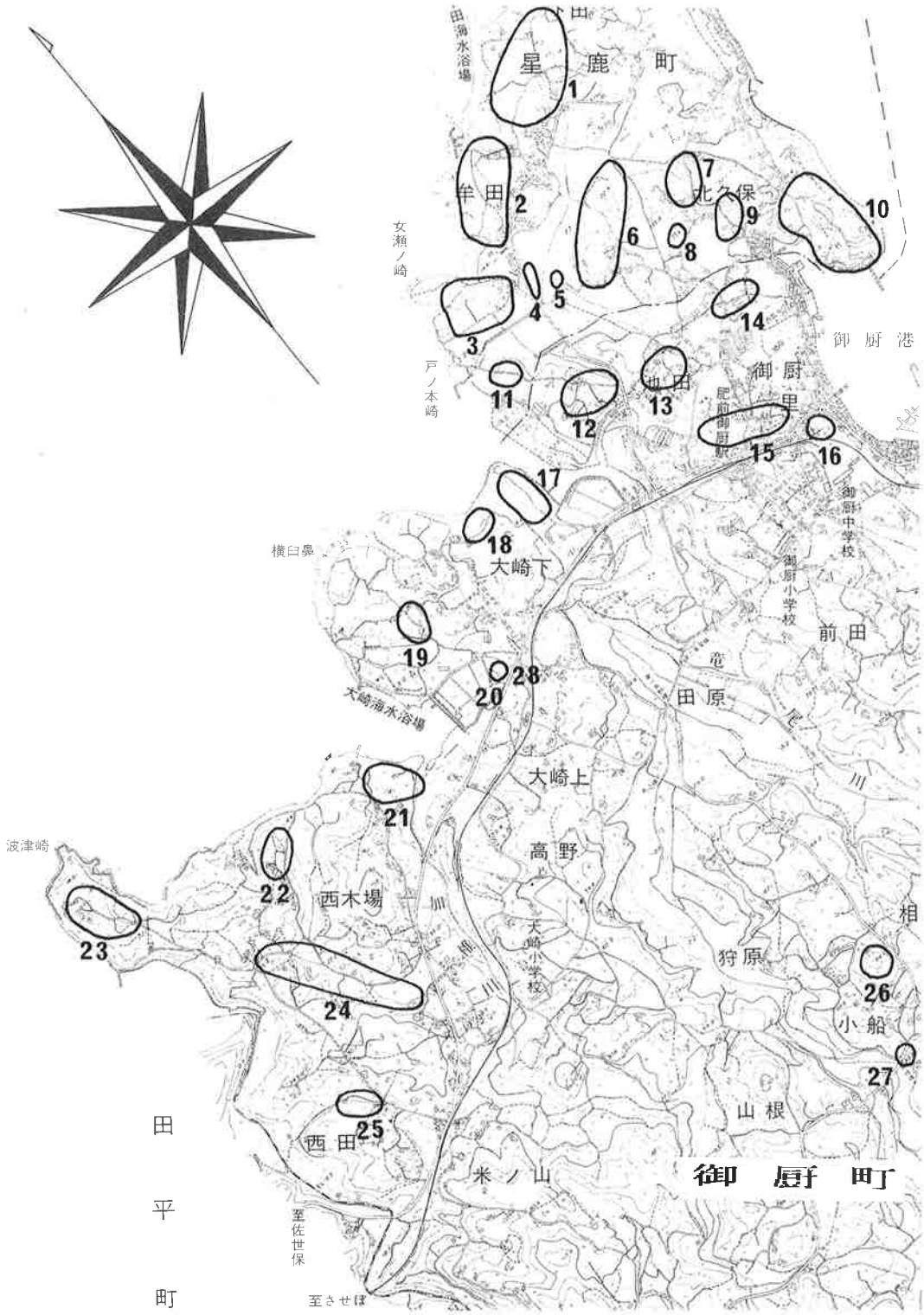


Fig. 2　松浦市西部地区遺跡分布図（$\frac{1}{25,000}$）

士達が佐々、相浦、吉井、江迎、志佐、今福方面から集まり、薬師堂の前に急造された土俵で技を競ったもので、観衆には地元はもちろん近郊からも集まっていたとの話であった。

Tab．1　松浦市西部地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	遺跡地図番号	備考
1	牟田B	星鹿町牟田免細	ナイフ形石器、細石核、細石刃、石鏃	8－71	
2	牟田A	〃　〃　中尾	ナイフ形石器、黒曜石原石	8－45	
3	佐世保崎	〃　〃　佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、黒曜石原石	8－47	昭和57年調査
4	牟田池上	〃　〃　池上	石核、石鏃、黒曜石原石	8－46	昭和58年調査
5	北久保経塚	〃 北久保免竿			2基
6	牟田C	〃　〃　藤園	ナイフ形石器、台形石器、掻器、石鏃	8－72	
7	北久保A	〃　〃　勢ノ巣	石鏃、弥生土器	8－41	
8	北久保B	〃　〃　北久保	剥片	8－42	
9	北久保C	〃　〃　浦頭	石鏃、剥片	8－43	
10	姫神社	〃　〃　宮崎	縄文土器、石斧、石鏃、石鋸	8－44	昭和41年調査
11	戸ノ本崎	〃　牟田免池上	ナイフ形石器、石斧、石鏃		
12	中ノ崎	御厨町池田免中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	8－50	
13	長蔵坊	〃　〃　長蔵坊	ナイフ形石器、ラウンドスクレーパー、黒曜石原石	8－49	
14	池田	〃　〃　田崎 〃　里免　下長峯	縄文土器、弥生土器、石斧 石鏃、白磁、青磁、獣骨	8－48	昭和25年調査
15	坂本	〃　〃　長峯	石鏃、黒曜石原石	8－66	
16	御厨城跡	〃　〃			
17	水尻A	〃　大崎免水尻	黒曜石原石	8－51	
18	水尻B	〃　〃	ナイフ形石器、石斧	8－52	
19	蕨川	〃　〃　俵場	黒曜石原石	8－53	
20	小嶋古墳群	〃　〃　小嶋		8－54	昭和62年調査
21	下谷	〃 西木場免下谷	スクレーパー、剥片	8－55	
22	田中	〃　西田免小田、田尻	スクレーパー、剥片	8－56	
23	波津崎	〃　〃　波津崎	剥片	8－57	
24	田口高野	〃　〃　田口高野 〃 西木場免寺山	ナイフ形石器 石鏃、剥片	8－58	
25	西木場	〃　西田免潮入	剥片	8－59	
26	城ノ越城跡	〃　小船免葉山			
27	葉山六地蔵塔	〃　〃		8－65	
28	小嶋	〃　大崎免小嶋	縄文土器、石斧、石鏃		昭和61年調査
29					
30					

3．調査の内容

小嶋古墳群はすでに述べたように昭和61年の大崎地区の排土埋め立て工事からの関連で、古墳群の基数及び遺構の概況把握することを目的とし、本古墳群の今後の保存対策を策定するための基礎資料を得るために行ったものである。

発見当初から古墳群３基すべてが封土をもたず、石室が露出しており、調査はそのうちの１基を行い遺構の時期等内容を把握することと、地域内の表土剝ぎ作業を行って遺構の数と分布状況を確認することの２点に主眼をおいて実施した。

表土剝ぎ作業は薬師堂裏側の約500㎡に渡って行った。表土層である腐蝕土層は薄く10cm～20cm程度で全体に堆積しており以下玄武岩風化土層に入る。薬師堂南側の標高約５ｍでは一部基盤である玄武岩層が露頭している所もあった。表土剝ぎ作業の段階で表土層より多数の縄文中期の阿高式系の土器片、及び同時期の石鏃、剝片鏃、サイド・ブレイトなどの石器等と須恵器等が採集されたが、新たな遺構は検出されなかったため、当初より古墳３基であったことが確認された。また、薬師堂南側に支石墓らしい遺構が認められたが、周囲の調査でも確認までには至らなかった。また、かつての古墳群の蓋石と思われる石材が江戸期の板碑として利用されている。

古墳群は、１号墳石室内及び羨道部の調査でも縄文の土器、石器片が多数出土したことからもかつての縄文期の土層を一部削平して構築されていることが確認された。

Fig.３　小嶋古墳群位置図（$\frac{1}{5,000}$）

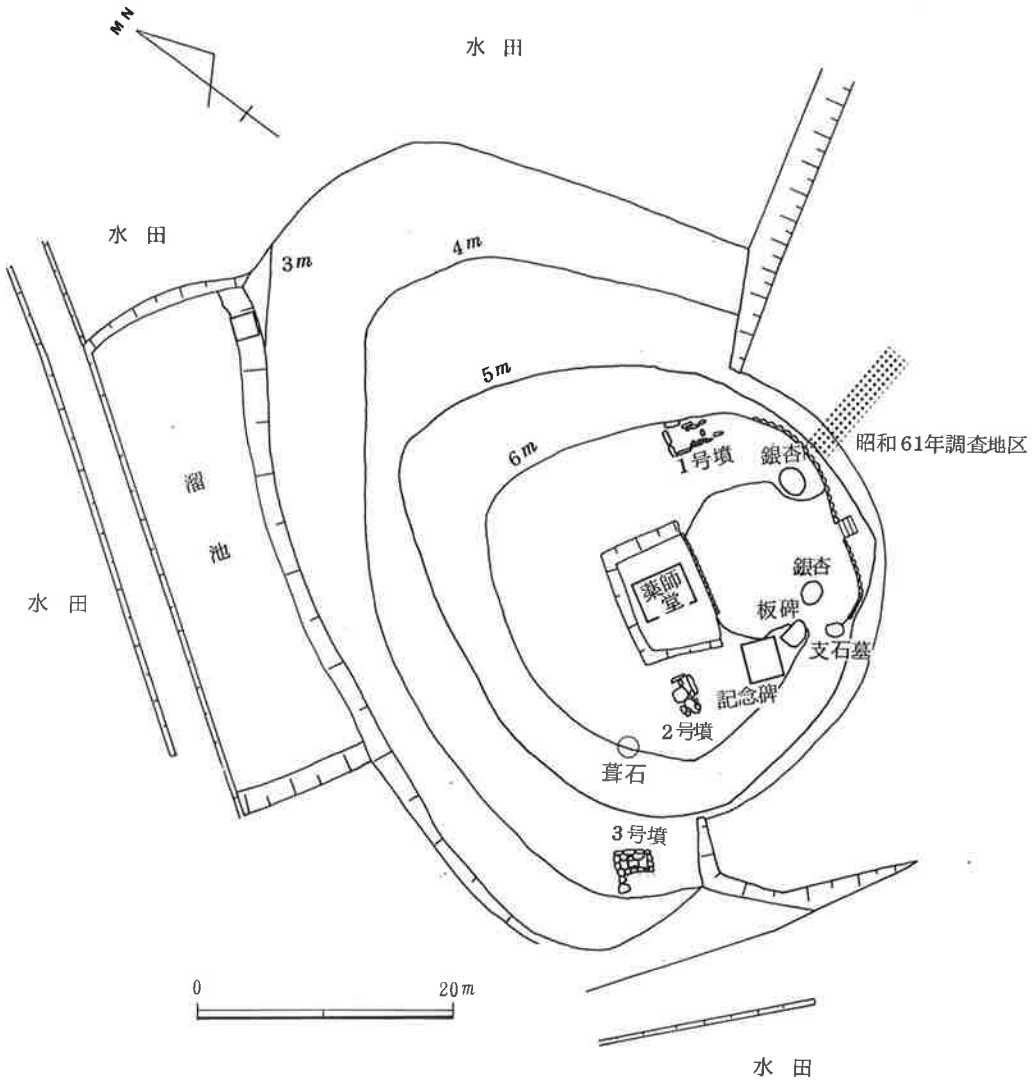


Fig. 4　周辺地形測量図 $\left(\frac{1}{600}\right)$

Ⅲ 遺　　構

1．1号墳(Fig．5)

小嶋の丘陵は楕円形状を呈し、丘陵の中央に薬師堂が建立されている。その南側に近接して小嶋新田の記念碑が建っている。1号墳は、小嶋古墳群中北東に位置し、標高6ｍの地点にある。埋葬施設は主軸をＮ－58°－Ｅにとり、南東に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室である。発見時において盛土の痕跡は全くなく、石室はすべて天井部を失って露出しており、それも下部構造の腰石、袖石のみで石積みは残存していなかった。内部も流土・壁石の崩壊によって完全に埋もれた状況であった。このため封土も削り取られて原形を復することはできない。石室を構築する石材には、近傍に産出する玄武岩が用いられている。石室は全長5.2ｍあり、玄室は奥幅2.3ｍ、前幅1.4ｍ、右壁長1.5ｍ、左壁長1.4ｍありほぼ方形プランを呈する。床面には拳大から長さ20～30㎝程の礫を比較的雑に敷き並べてあり、周壁は奥壁に2枚、両側壁に各2枚の腰石を配している。奥壁左側と右側壁は敷石との間隔が広いため、原位置より移動している。玄門は方柱状の塊石を縦位に立てて用いた両袖石より形成され、幅0.75ｍを測る。通路幅は袖石の幅だけせばめて羨道を構築している。みだれているが閉塞施設と思われる部分が羨道の南側に存在している。幅は羨道幅いっぱいである。本来は、天井まで達し、羨道を密封していたものと考えられる。墓道については、南側に薬師堂境内との境の石垣があり不明である。

2．2号墳、3号墳

2号・3号墳については、発掘調査は行わず、周辺の清掃と、写真撮影を行ったのみである。2号墳は1号墳の西側にあり薬師堂の南西に位置する。標高は1号墳とほぼ同じ6ｍの地点にある。1号墳同様石室部分が露出し、天井石も原位置をとどめていない。壁面の石も崩落し、石室内にあるため、おそらく、これらの上に石を持送りに積み上げて石室を作っていたと考えられる。3号墳は最も西側に位置し、標高は1・2号墳より低い4ｍの地点にある。同墳は地区の人々から疱瘡の神様としてかつては祀られていたとのことである。ほぼ中央に砂岩製の五輪塔の空輪の一部が残っている。東側には4枚の石を立てており、古墳の石室とは思われない節もあるが、発掘調査も行っていないためここでは3号墳として報告しておくにとどめたいと思う。

3．その他

薬師堂南東側の標高6ｍの地点に支石墓らしき遺構がある。東側は境内との境の石垣と接しており、古墳の天井石を板碑として利用しようと思い、運搬中に放棄した石なのか、支石墓の掌石なのかは不明である。ただし、掌石を支える支石の存在の確認までには至らなかった。2号墳の西側約5ｍ程の地点に葺石と思われる20～30㎝大の礫が大量に検出された。これらは2号墳と関係するものなのか、また、同溝の確認はできなかった。同遺構は現状のままで埋め戻しを行った。その他新しい古墳の発見には至らなかった。

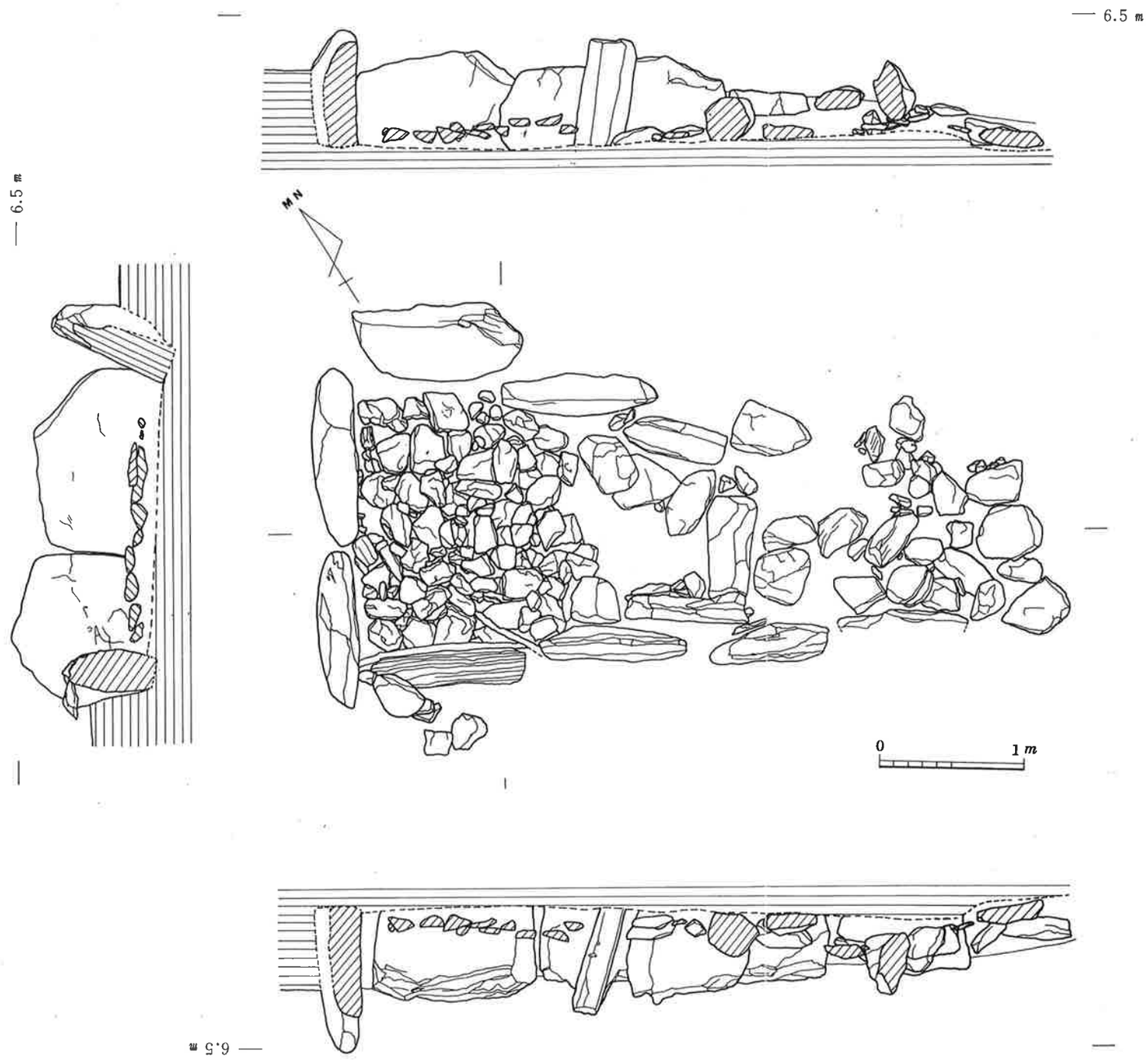


Fig. 5　1号墳石室実測図 ($\frac{1}{40}$)

Ⅳ 遺　　物

1．1号墳遺物出土状況(Fig．6)

玄室および羨道から遺物が出土している。玄室内には埋土とともに近代・近世の陶磁器および縄文土器・石器などの破片が多く発見された。陶磁器は上部の出土であり、本玄室の副葬品とは無関係である。これら後世の遺物は本報告では取扱わないことにする。土器・石器は敷石内からも敷石下部からも検出され、古墳構築が縄文期の土層の一部を削平して行われたことが窺われる。玄室内からは耳環・勾玉・ガラス玉・練玉の装身具、直刀・刀子・鉄鏃などの武具が出土している。羨道部の閉塞石の礫の間や下部から須恵器甕・壺・杯などの破片がバラバラの状態で出土した。玄室においては耳環・勾玉等が集中して発見され、比較的原位置を保つものと考えられ、被葬者の頭位が南西にあったことが窺われる。玄室内からの須恵器は1点のみであった。左袖石は玄室内に向かって約15度傾斜しており、袖石の下の敷石の上に杯が口縁を下にして出土している。尚、玉類は玄室埋土の水洗作業より検出したものもある。

Fig．6　1号墳遺物出土状況 $\left(\frac{1}{80}\right)$

2．出土遺物(Fig．7～8)

銀環　大小4個が出土している。みな平面・断面ともほぼ円形である。多少とも緑銹を帯びており、胴芯銀張りが部分的に剝落している。**4**は剝落が著しい。

勾玉　やや大型と小型の2個が出土している。**5**・**6**とも碧玉製で、暗緑色を呈する。形態的にはC字状に近く扁平で片面より穿孔している。**5**は5.75g。**6**は1.85g。

丸玉　6個出土しているが、2個は破片であるため4点を図示した。**7**は碧玉製で暗緑色。**8**は滑石製で緑灰色。**9**・**10**はガラス製で黄緑色を呈している。**10**は雁木玉の可能性を指摘されている。

小玉　出土総数65個を数える。そのうち玄室内より11個出土している。このうち実測可能な9点（**11**～**19**）を図示した。**11**～**14**はガラス製、**15**～**19**は土製で、色調は**11**が茶色、**12**～**14**は青緑色である。水流作業で54個が検出されたがこのうち実測可能な18点（**20**～**37**）を図示した。**20**は滑石製で、**21**～**24**はガラス製である。色調は**20**が緑灰色、**23**が暗緑色、**24**が緑色、**21**・**22**

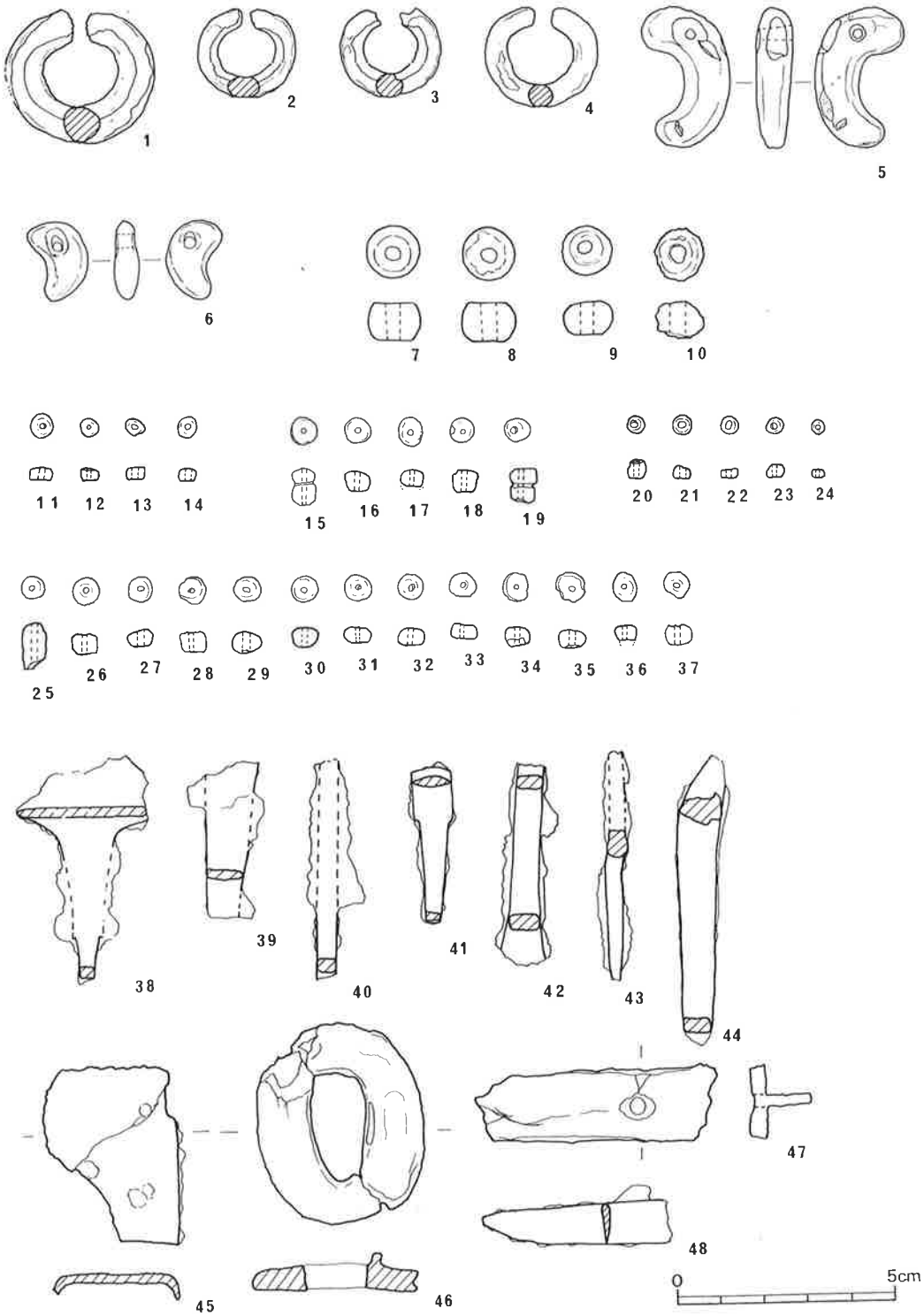


Fig. 7　1号墳出土遺物（$\frac{2}{3}$）

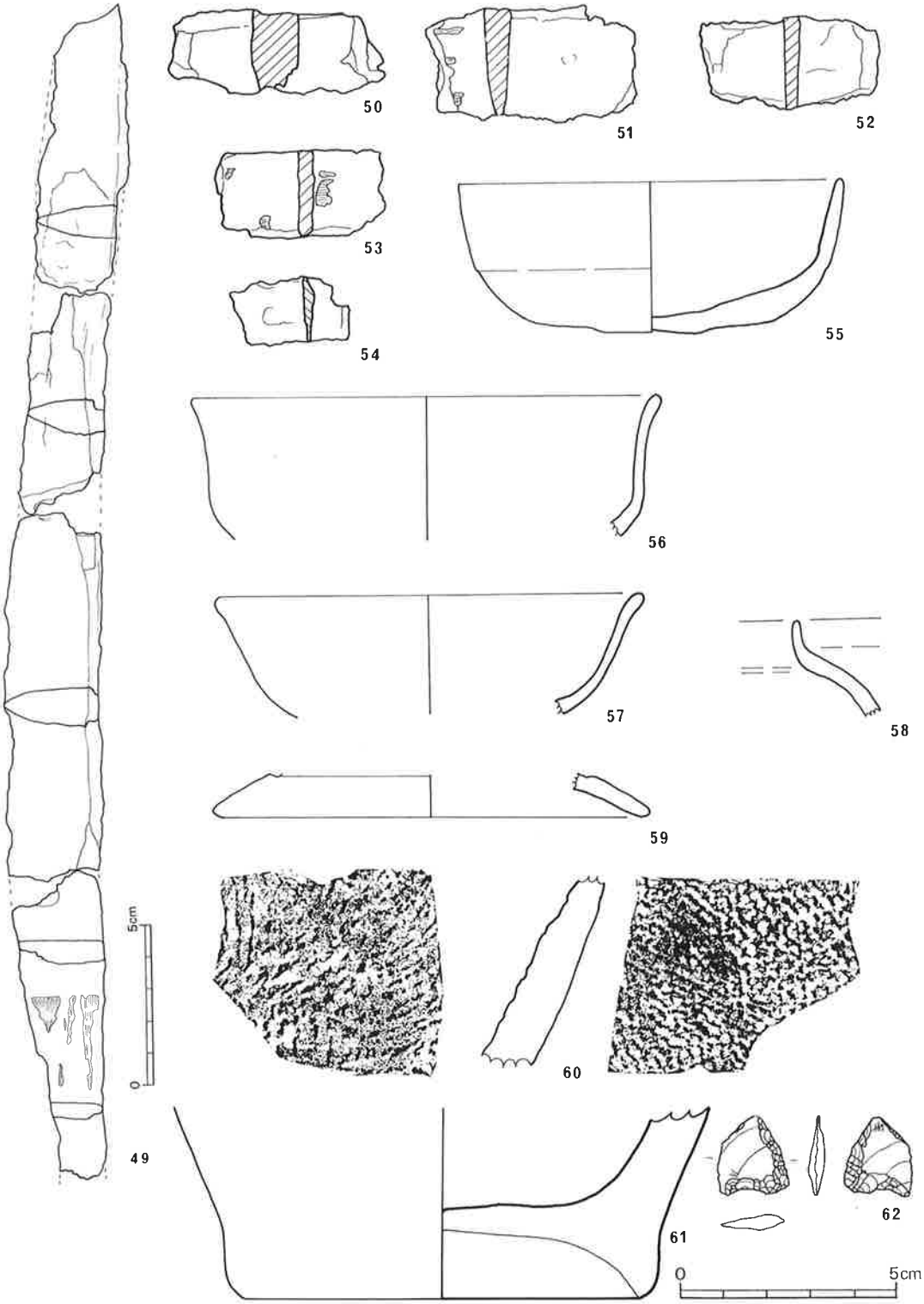


Fig. 8　1号墳出土遺物（$\frac{1}{2}$、$\frac{2}{3}$）

は青緑色である。**25〜37**は土製の練玉である。この土製練玉は側面形が丸く、丸小玉に近い形態である。しかし、**15・19**のように２個体分の中央に刻み目を入れているものも出土している。**25**は小玉よりも管玉に含まれる。

鉄器　玄室内より17点が出土している。**38〜44**は鉄鏃である。**38**は平造広根式の有茎平根鏃で、箆被部から湾曲して関部をつくり、鏃の最大幅をとっている。**41**も有茎平根鏃。他はいずれも茎部の破片と思われる。**45**は鞘尻金具であろう。**46**は２片に折れているが楕円形を呈する鍔である。**47**は長さ5.4cm、幅1.6cmの細長い長方形で１個の鋲が付いている留金具である。本玄室内から他に馬具関係の鉄器は見当らず、短甲に付随する金具とも考えられる。**48**は両関の刀子で、全体に小ぶりで断面が二等辺三角形をなす。**49**は保存状態は極めて悪く、４個体よりなるが同一個体と考えられる鉄刀である。両関で身の断面は二等辺三角形である。全長は36cm前後になると思われ、最大身幅３cm、茎部端を欠いている。背は平造りで、刃は柄に近い部分でわずかに内湾する。鞘に収められて副葬されていたと思われ、茎部には表面僅かに木質が残っている。**45・46**と同一個体となるのではないだろうか。**50〜54**は刀子の破片で、**50**は刀身と思われる。**51・53**は茎部片と思われ木質が付着している。鉄器はいずれも全体に銹がひどい状況である。

須恵器　玄室より１点と羨道部より11点が出土している。うち実測可能な５点を図示した。**55**は玄室より出土の杯身である。口径8.8cm、器高3.5cmを測る。体部のやや中央にわずかなへこみがあり、その部分から口縁部にかけ小さく外反して立ち上がり直線的に伸びる。底部は平坦化して、ヘラおこし後未調整の痕跡が明瞭にみられる。内面はナデ、他は横ナデを施している。色調は内外面とも灰色を呈する。焼成は不良。**56〜60**は羨道部出土である。**56**は底部を破損しているが、口径10.8cm、器高４cm前後と思われる杯身である。器壁は大変うすい。体部中央から口縁部の外湾してのち直線的に伸び口唇部はやや外反している。焼成は良く、暗青灰色を呈する。**57**も器壁が大変うすく、底部を破損している。内湾気味に立ち上がり口唇部をやや外反させた杯身である。口径9.8cm、器高３cm前後と思われる。色調は内面暗灰色を呈する。焼成はほぼ良。**58**は短頸壺の破片である。**59**は破片のため不明であるが高杯の脚端部の可能性がある。**60**は甕体部片で、同一個体が２点出土している。内面は同心円文、外面は格子目タタキである。この資料は周辺より出土した甕（Fig.９－15）と同一個体である。

その他　**61**は玄室内の埋土より出土した阿高式系統の底部である。底部の張り出しが弱く、胎土に滑石を混入している。**62**は羨道埋土より出土の剝片鏃で黒色黒曜石製である。

3．表面採集資料（Fig. ９〜11）

古墳群の規模および確認について表土剝ぎ作業を行ったが、表土剝ぎの段階で多数の遺物が採集された。近年まで素人相撲が行われていたとのことであるが、十銭、一銭、寛永通宝などの硬貨および近世・近代の陶磁器も採集されている。これと同時に本来の遺跡と関係する縄文

土器、石器、須恵器等も検出した。

土器　1～13は縄文土器で、縄文中期の阿高式系統に含まれる。1は口縁部から胴部にかけての資料で、復元口径25cmの鉢形になる。口唇部は平坦で、竹管による刺突が施され、均等間隔に同じ工具によって区切られている。胴部には粘土隆帯を貼付し、同じ方法で刺突が施されている。両面とも横ナデし、胎土焼成とも良好である。色調は赤褐色で、2は口縁部に深い平行凹線文があり、口唇部には刺突が施されているが、かなりのローリングを受けている。色調は黄褐色である。3も口縁部の資料で、凹線文が施されている。色調は赤褐色である。4は口縁部に楕円形の連点文を施している。色調は赤褐色である。5は胴部の資料で複線によるモチーフが強調されている。6は波状口縁を成す。口唇部には刺突が施され、胴部にヘラ状もしくは棒状の先端を使用し、浅い凹線を力強く描いている。7～13は底部の資料で、底部の張り出しが強いもの、底部の張り出しが弱いもの、張り出しが無く胴部からの移行がストレートなものとに分けられる。7・9は底部外側に凹点をつけており、8は明瞭な凹線が施されている。13は底部張り出しが特に強い。いずれにも胎土に滑石を混入している。14～17は1号墳周辺で出土した須恵器で、14～16は甕で、17は平瓶と思われる。14は体部外面の格子目タタキの上面をナデた痕跡がみられる。口唇部はつまみ上げている。内面は同心円の叩きを施している。色調は灰青色を呈する。復元口径21.8cmである。体部は球状にふくらむものと思われる。内面は頸部から口唇部にかけて回転によるナデで調整している。15は頸部は大きく外反して立ち上がり、口唇部はコの字形で直下は小さな段をもつ。頸部と体部との境は粘土継ぎ目が明瞭である。体部内面は同心円文、外面は格子目タタキ。頸部に一部自然釉がある。復元口径25.2cm。16は復元口径14.8cmでやや小ぶりの甕である。17は肩部・頸部・口縁部を欠損しているが平瓶になると思われる。底部は丸みを帯びる。体部最大径は15.7cmを測る。外面頸部には回転横ナデが施されている。

石器　石器29点は、いずれも表土層からの出土品である。石器の内容としては、石斧、石匙スクレーパー、石鏃、サイド・ブレイド、石銛等よりなる。

18は石斧である。刃部が石斧の最大幅になる。厚みはなく薄い。19は石匙である。半欠品である為全体の形状は知り得ないが、つまみ部が小さい。光沢のない黒色黒曜石製。20～22はスクレーパーである。いずれも安山岩製である。大きさは大小まちまちであるが、刃部の作り出しの調整の仕方をみてみると、表裏両面からの調整加工ではなく、片側からのみの調整でスクレーパーエッヂを作り出しているという共通点がある。22のものは、調整加工の剥離が大きいが、刃部角度も他の2点に比べて大きい。23は円礫を素材とする黒色黒曜石製石核である。左図の面にみる様に、まず、図の上での横からの剥離を行った後、裏がえしして、前の剥離に裏がえしの面で直交する形で剥離を行っている。最初の剥離の時には打面調整を施している。

1～21は、石鏃である。21点ともに黒曜石であるが、1は光沢のない黒色の黒曜石、11は灰青色の黒曜石、17は灰色の黒曜石である。また、20は透明度の高い黒曜石で、他の17点は黒色

半透明の黒曜石を使用している。石鏃の形態は、バラエティーに富んでいるが、大まかに平基式のものと凹基式のものとに分かれる。平基式を１類、凹基式を２類とした。平基式の１類のものでも石鏃の下端が外湾するもの1a類と、内湾するもの1b類とに分けられる。そして、内湾するものでも側縁に鋸歯加工をもつもの$1b_1$類と、そうでないもの$1b_2$類とに分かれる。次に凹基式のものは、表裏に素材である剥片の一次剥離面が認められるものを2a類とした。但し、2a類はいずれも側縁に鋸歯加工をもっている。2b類は表裏一次剥離面が認められない打製鏃であるが、鋸歯加工をもつもの$2b_1$類と、加工がないものを$2b_2$類とした。３類は剥片鏃。

１ａ類は**17**・**21**、$1b_1$類は**15**、$1b_2$類は**11**がある。2a類は**2**・**5**・**13**、$2b_1$類は**4**・**16**、$2b_2$類は**1**・**3**・**6**・**7**・**8**・**9**・**10**・**12**・**14**である。３類は**20**である。

22はサイド・ブレイドで、両面とも全体に平坦剥離を施している。黒曜石製。

23は黒曜石製としては大形のもので、形状は二等辺三角形を呈し、先端部を欠損する。ここでは石鏃に分類するより石銛としてとらえたい。重さ８ｇ。

本遺跡出土の石鏃の特徴として注意しておきたいのは、典型的な剥片鏃の他に表裏に一次剥離面をもった石鏃が４点あることと、そして、鋸歯加工を側縁にもつものが６点あることである。**2**・**5**・**13**・**15**の４点はそのどちらの条件も備えている。

Tab.2　１号墳出土装身具計測表

図版番号	種別	材質	長さ(高さ)	幅(径)	孔径	色調	備考	図版番号	種別	材質	長さ(高さ)	幅(径)	孔径	色調	備考
7-1	耳環	銅芯銀張	34	8.1				7-20	小玉	滑石	4.1	4.1	1	緑灰色	
2	耳環	銅芯銀張	22	7				21	小玉	ガラス	4.1	3	1.2	青緑色	
3	耳環	銅芯銀張	23	6				22	小玉	ガラス	4	2.1	1.2	青緑色	
4	耳環	銅芯銀張	25	5.2			剥落	23	小玉	ガラス	4.2	3	1.2	暗緑色	
5	勾玉	碧玉	31.5	10	2.2～4	暗緑色	片面穿孔	24	小玉	ガラス	3	2	1	緑色	
6	勾玉	碧玉	17.8	9.3	3.5～4	暗緑色	片面穿孔	25	管玉	土	5.5	10.8	1.1	黒色	
7	丸玉	碧玉	12	8.5	3～3.3	暗緑色		26	小玉	土	6	5	1	黒色	
8	丸玉	滑石	12	9	3.5	緑灰色		27	小玉	土	6	4	1.5	黒色	
9	丸玉	ガラス	11	7.8	2.9	黄緑色		28	小玉	土	6	4.5	1	黒色	
10	丸玉	ガラス	10.9	8.2	4	黄緑色		29	小玉	土	6.5	4.9	1.7	黒色	
11	小玉	ガラス	5	4	1.1	茶色		30	小玉	土	6	4.3	1.1	黒色	
12	小玉	ガラス	3.2	2.9	1.2	青緑色		31	小玉	土	6	3.8	1	黒色	
13	小玉	ガラス	4.2	3	1.2	青緑色		32	小玉	土	6	4	1.2	黒色	
14	小玉	ガラス	4.2	3	1	青緑色		33	小玉	土	6	4.3	1	黒色	
15	小玉	土	5.2	8.2	1	黒色		34	小玉	土	5.9	4.3	1	黒色	
16	小玉	土	6	5	1	黒色		35	小玉	土	6	4	1.3	黒色	
17	小玉	土	5.4	3.8	1	黒色		36	小玉	土	5.2	3.2	1	黒色	破損
18	小玉	土	6	5.1	1	黒色		37	小玉	土	6	4.9	1.2	黒色	
19	小玉	土	6	8	1	黒色									

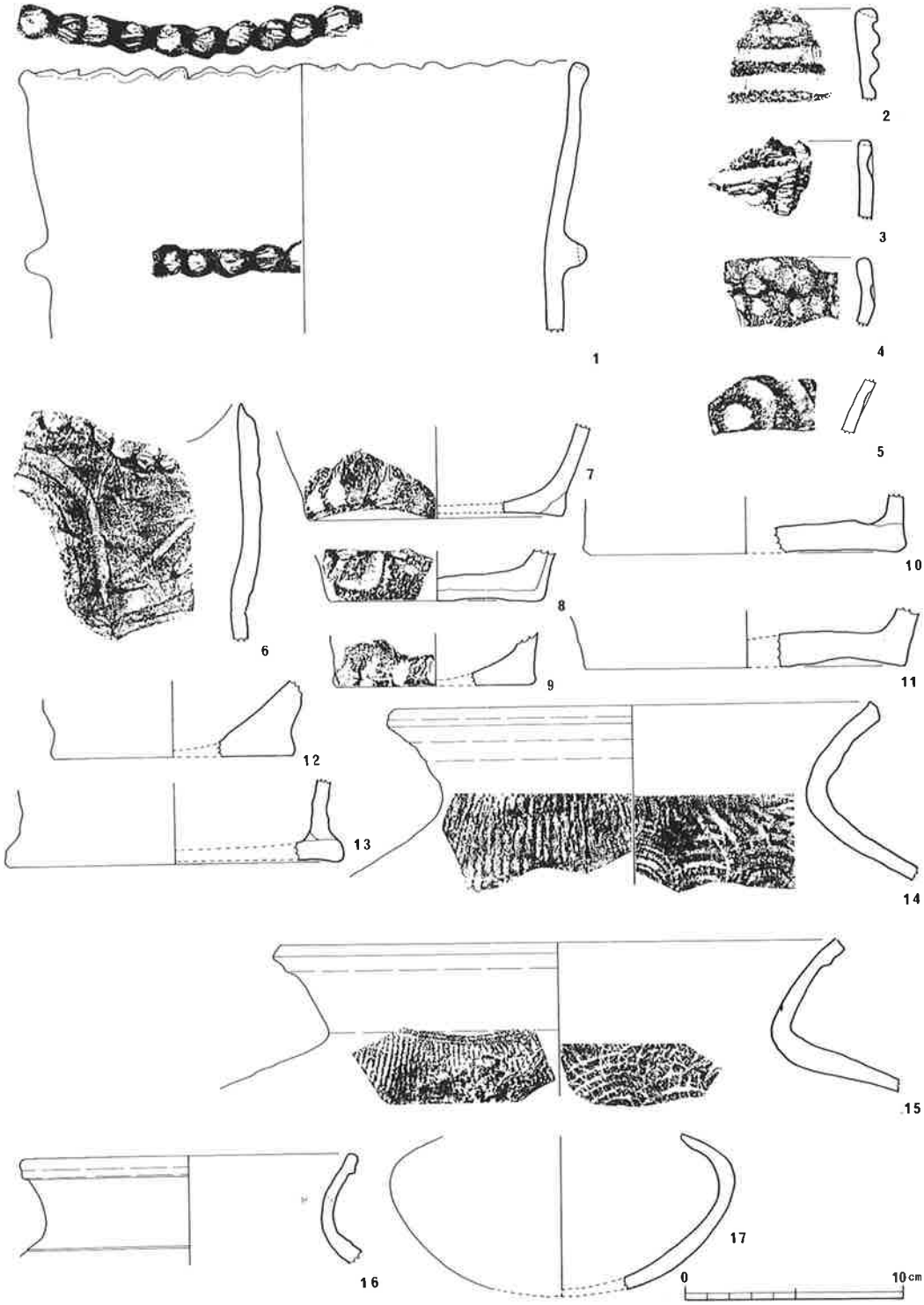


Fig. 9　表面採集遺物（$\frac{1}{3}$）

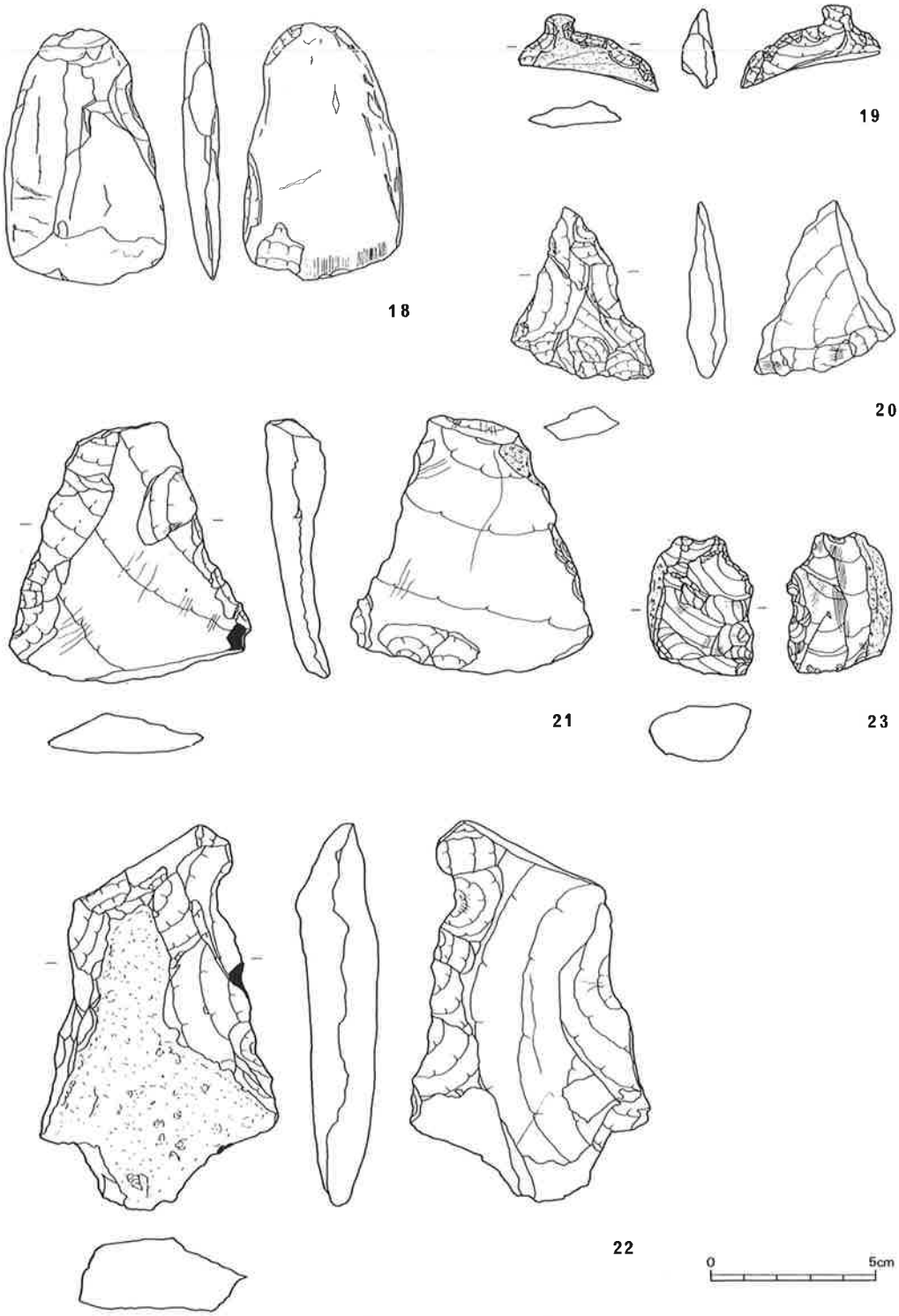


Fig. 10　表面採集遺物（$\frac{1}{2}$）

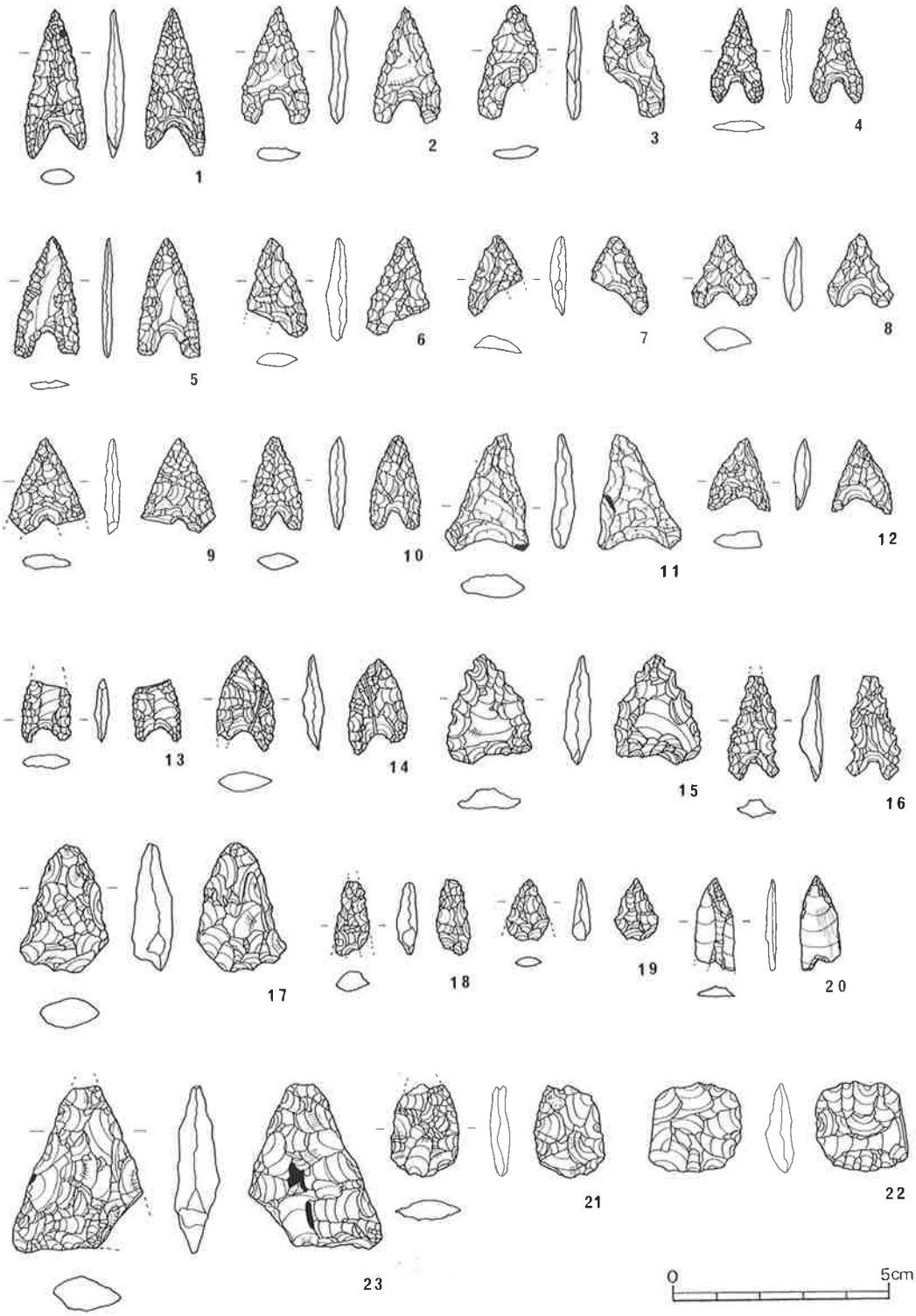


Fig. 11　表面採集遺物（$\frac{2}{3}$）

V 小　　結

今回の調査は小規模なものではあったが、古墳群範囲確認調査という当初の目的を達成することができた。小嶋古墳群は当初より３基であり、表土剝ぎ作業においては、葺石と思われる礫群が確認された他は新たな遺構の出現には至らなかった。１号墳も当初は盗掘を受けているだろうと思いその成果は期待していなかったが、遺物も大部分が古墳の年代を知る手掛りを与えてくれた。石室の構造は、側壁から上部の天井部を失っていて良好ではないが、石室平面形は比較的良好な状態で残っており、方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室を埋葬主体としていた。築造年代については、土器による手掛りを杯に求めるならば第Ⅵ期になり、７世紀後半代に比定できるであろう。また、発掘調査を実施していない２号墳も石室形態が類似しており近接した築造年代が推定できるであろう。これらの古墳群に眠る被葬者の居住地は周辺の丘陵地帯に求めることができるが、県北一帯の後期古墳の立地を見た場合、北松・福島・鷹島・大島・生月・平戸度島などの海岸部に存在しており、小嶋古墳群も同じ環境立地よりその被葬者が海洋的性格を有していたと思われ、漁業集団の突出した人々が埋葬されているものと思われる。

松浦地方における古墳時代の様相は皆目不明でありました。今回の調査で松浦地方における先人の活動の一端を知ることができ、郷土の歴史に新たなページを加えることができたのは大きな成果でありました。

最後に切迫した時間での稿を草するにあたりまして、ご協力を頂いた皆様方に心から感謝を申し上げます。

図　　版

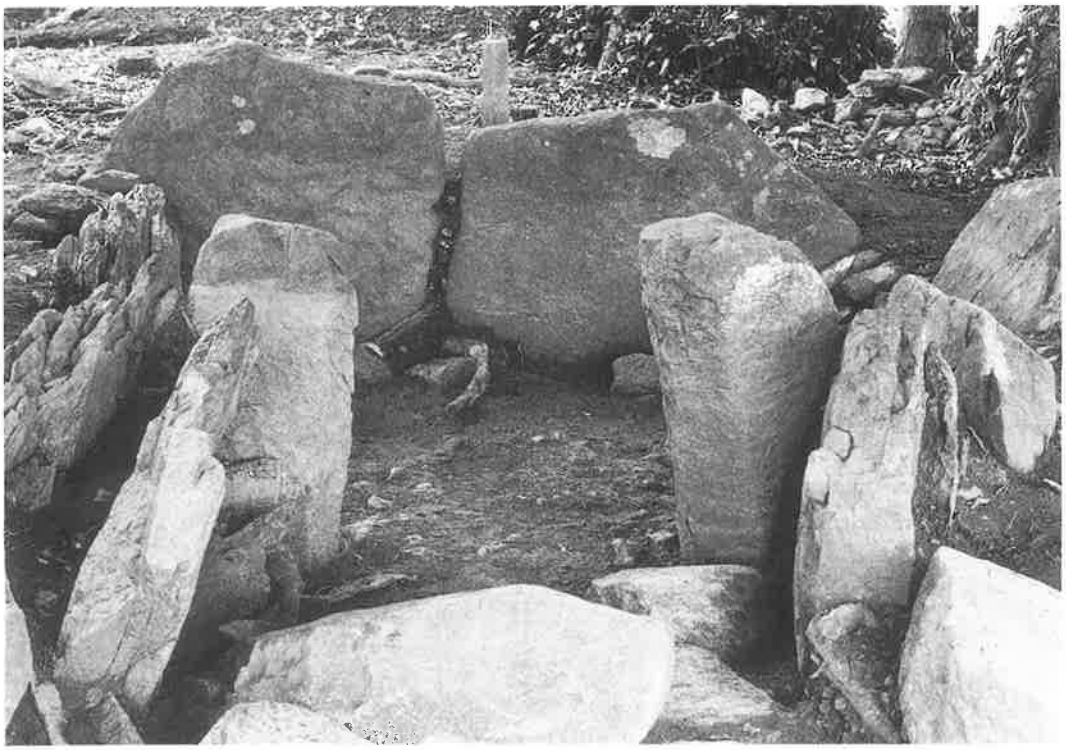
PLATES

PL. 1　小嶋古墳群遠景（南より）

PL. 2　小嶋古墳群近景

PL. 3　1号墳玄室敷石状況

PL. 4　1号墳石室全景（南西より）



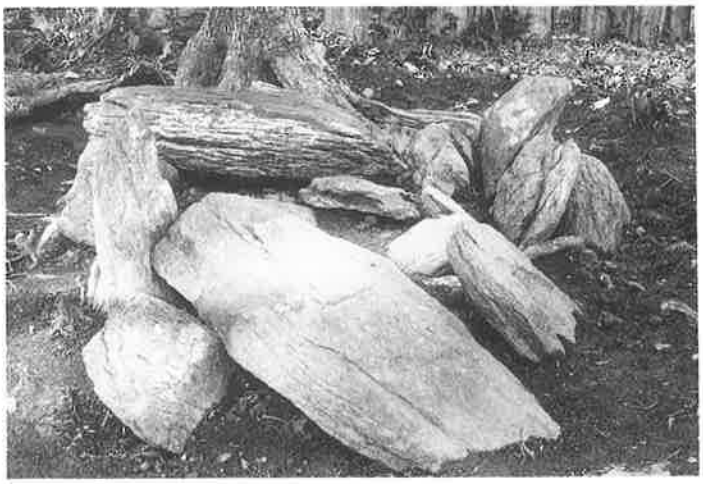
PL. 5　1号墳石室奥壁

PL. 6　1号墳羨道

PL. 7　1号墳玄室内遺物出土状況

PL. 8　1号墳玄室内遺物出土状況

PL. 9　2号墳全景（東より）



PL. 10　2号墳全景（南より）

PL. 11　3号墳全景（東より）

PL. 12　支石墓（?）全景

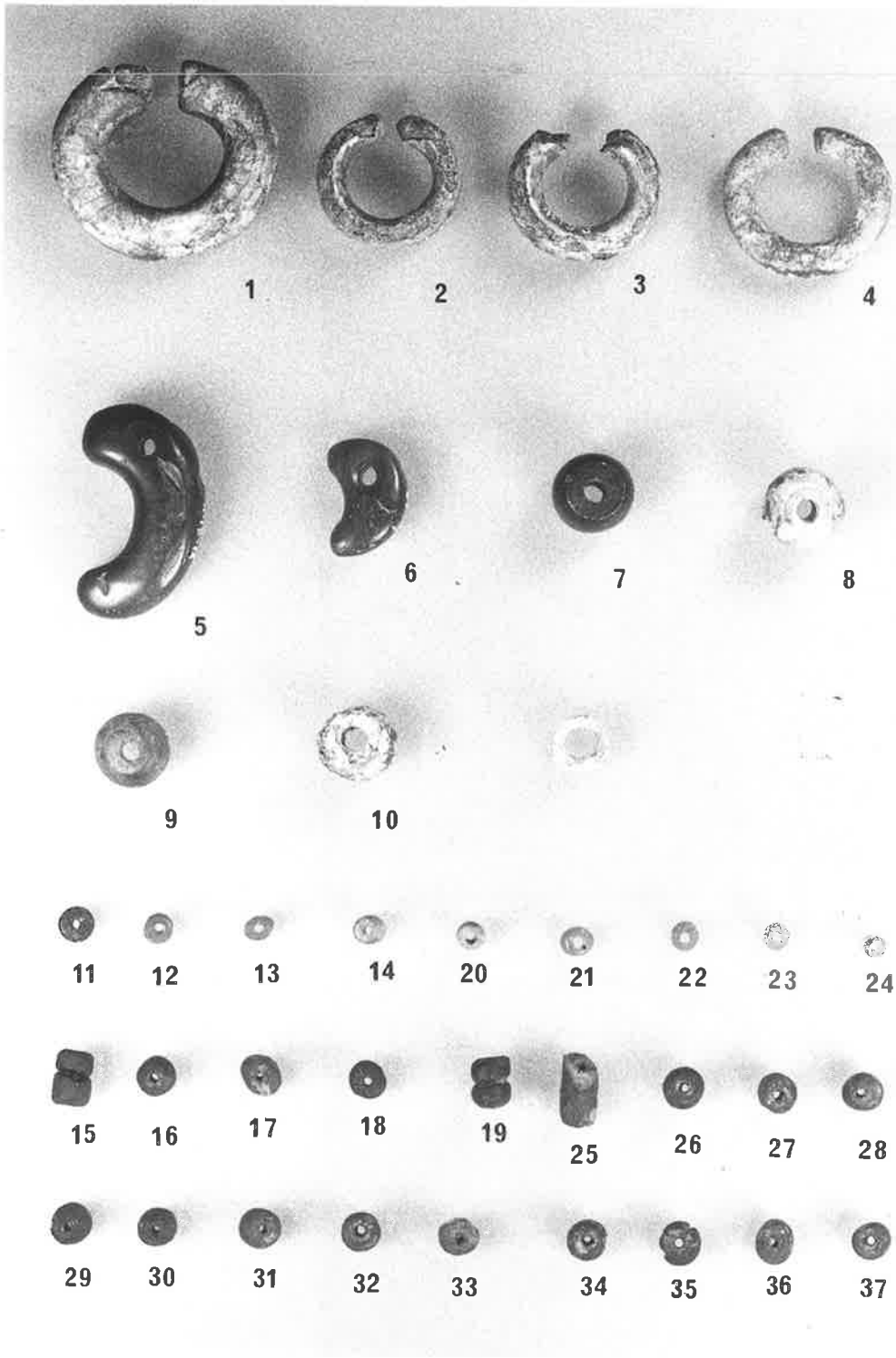
PL. 13　葺石状況

PL. 14　板　碑

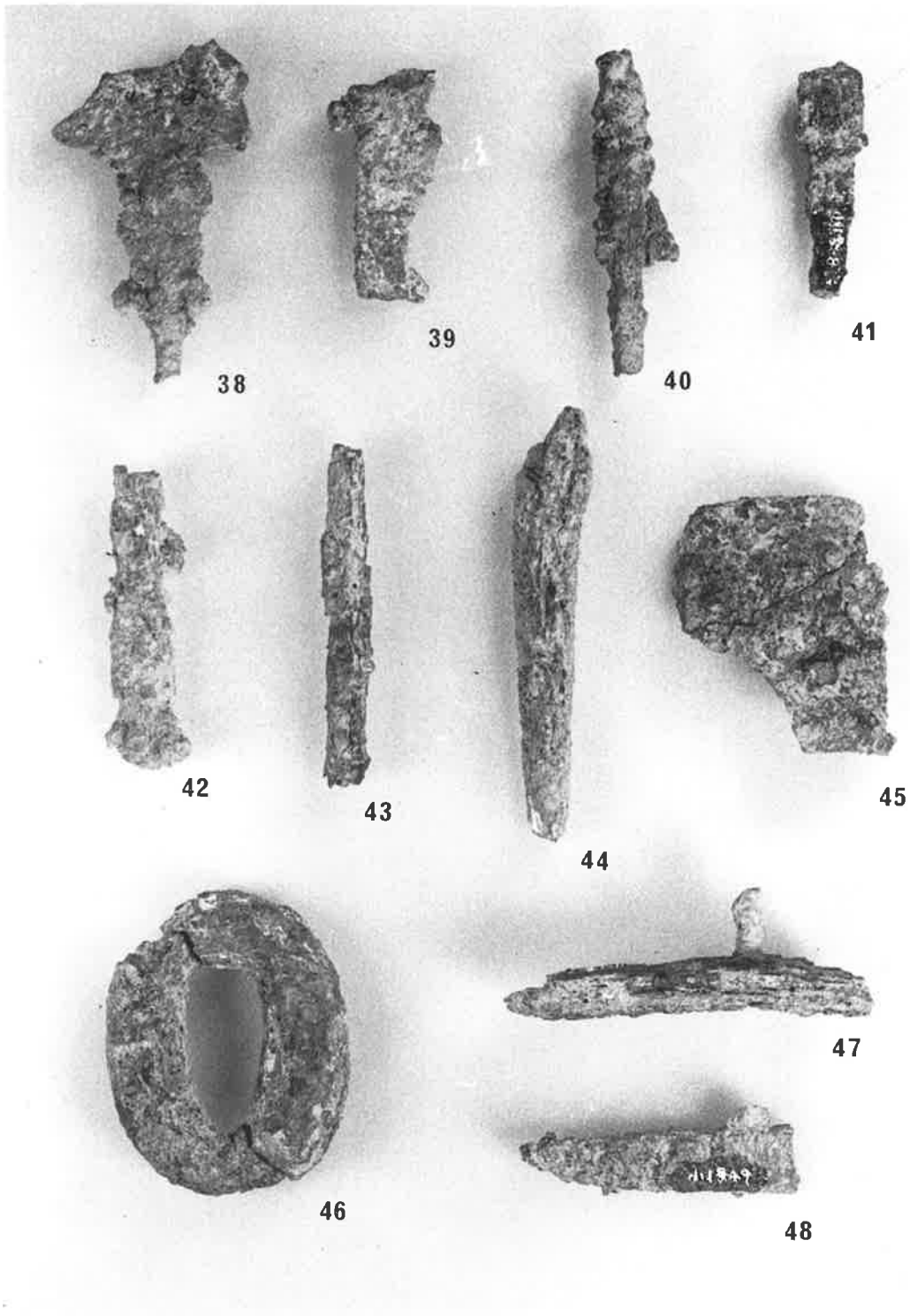
PL. 15　板　碑

PL. 16　板　碑

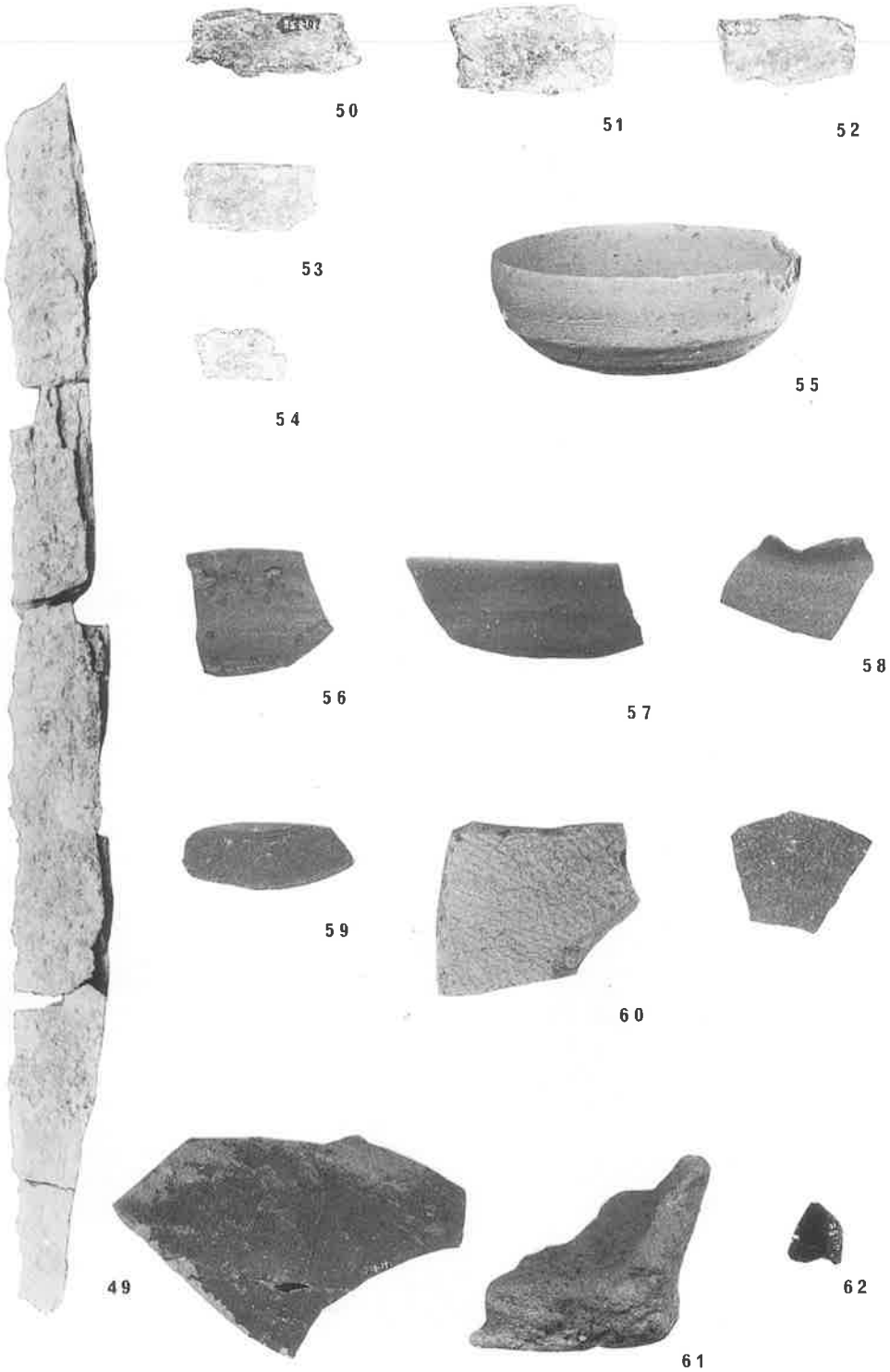
PL. 17　遺物出土状況



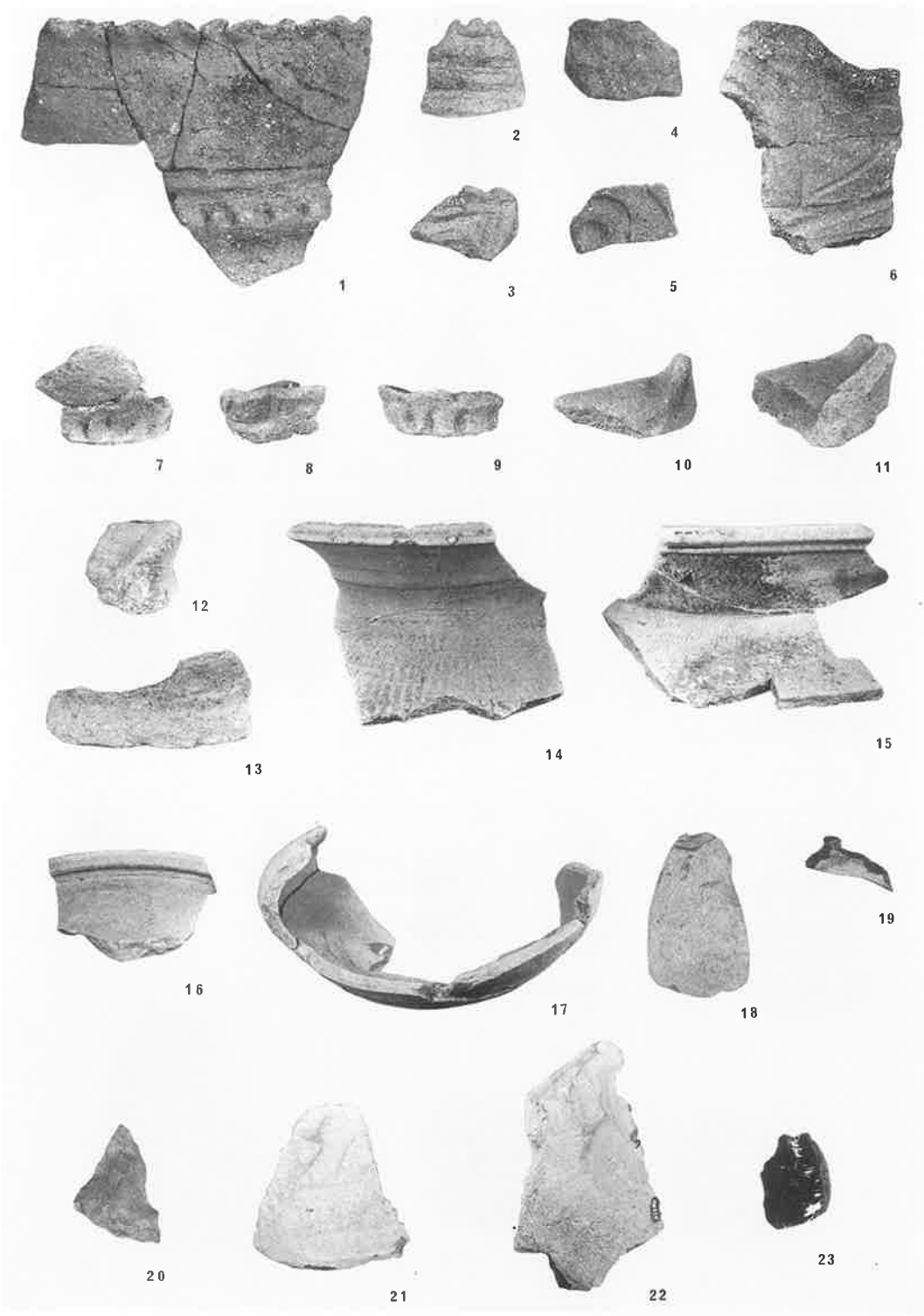
PL. 18　1号墳出土遺物 $\left(\frac{1}{1}\right)$



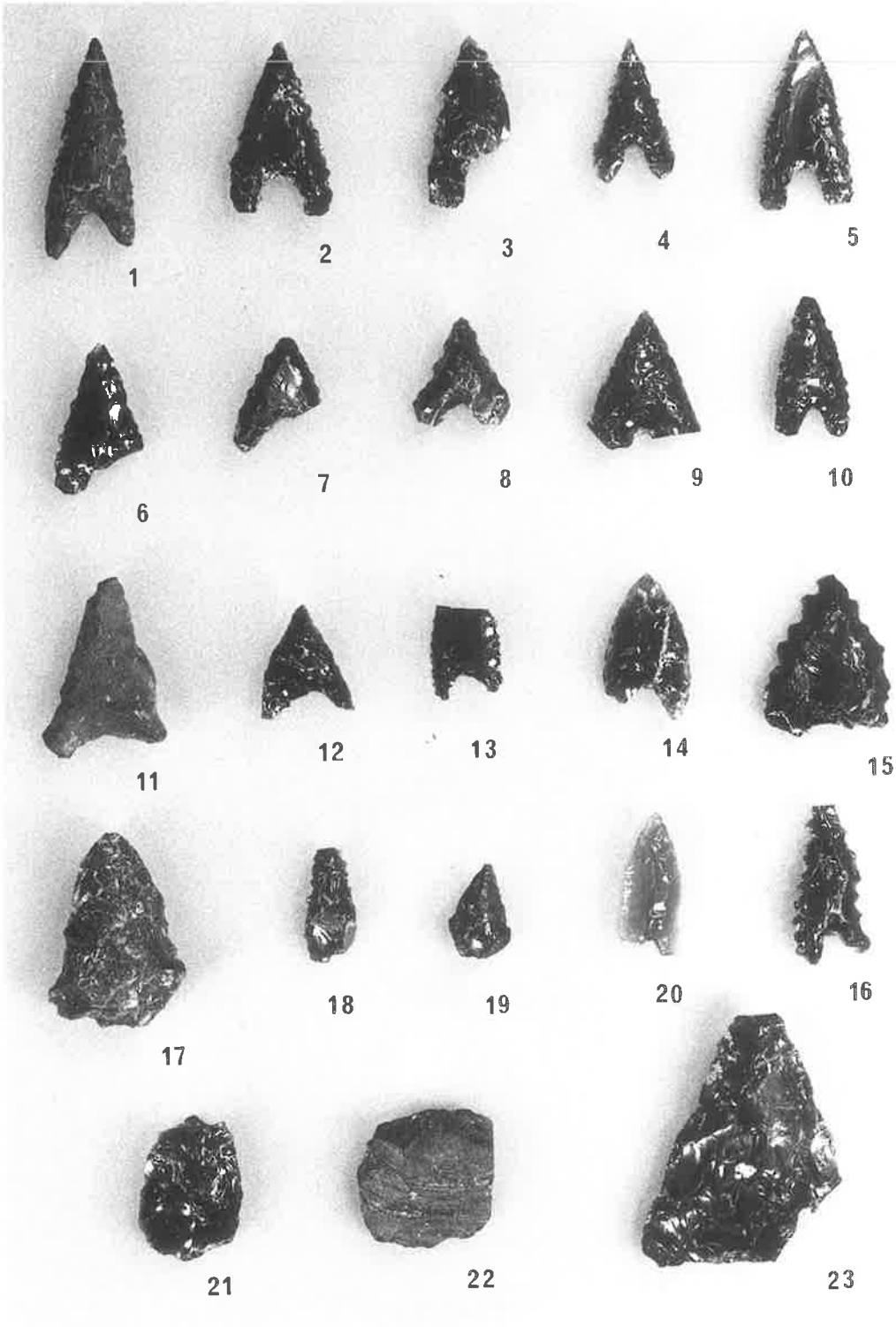
PL. 19　1号墳出土遺物 $\left(\frac{1}{1}\right)$



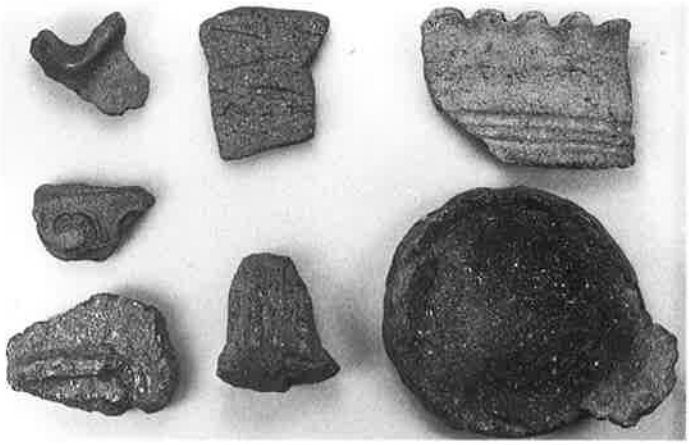
PL. 20　1号墳出土遺物（$\frac{1}{2}$）



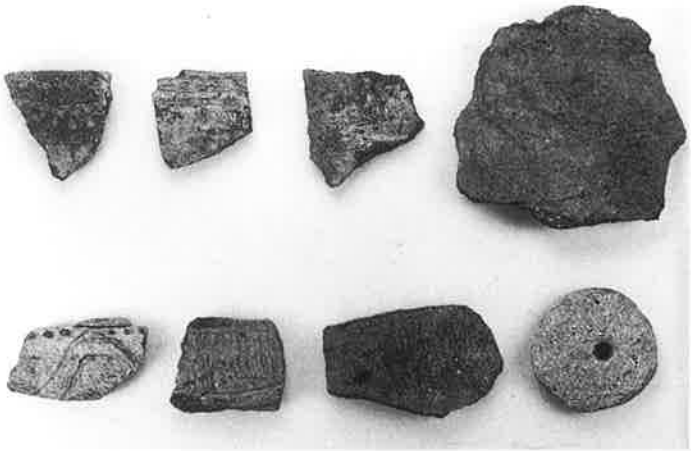
PL. 21　表面採集遺物（$\frac{1}{3}$）



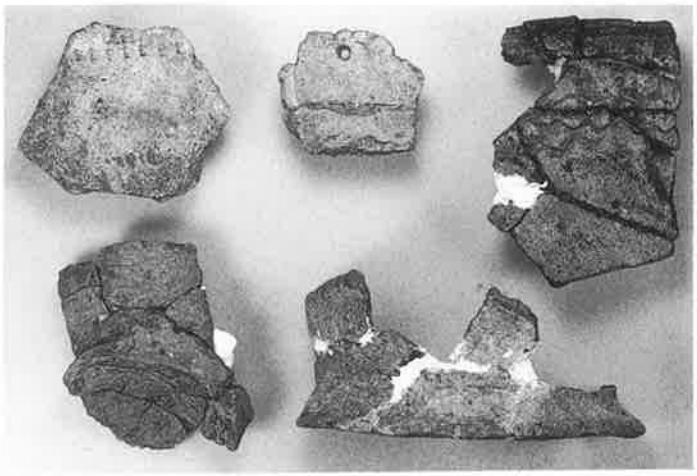
PL. 22　表面採集遺物（$\frac{1}{1}$）



PL. 23　小嶋遺跡出土土器



PL. 24　小嶋遺跡出土土器



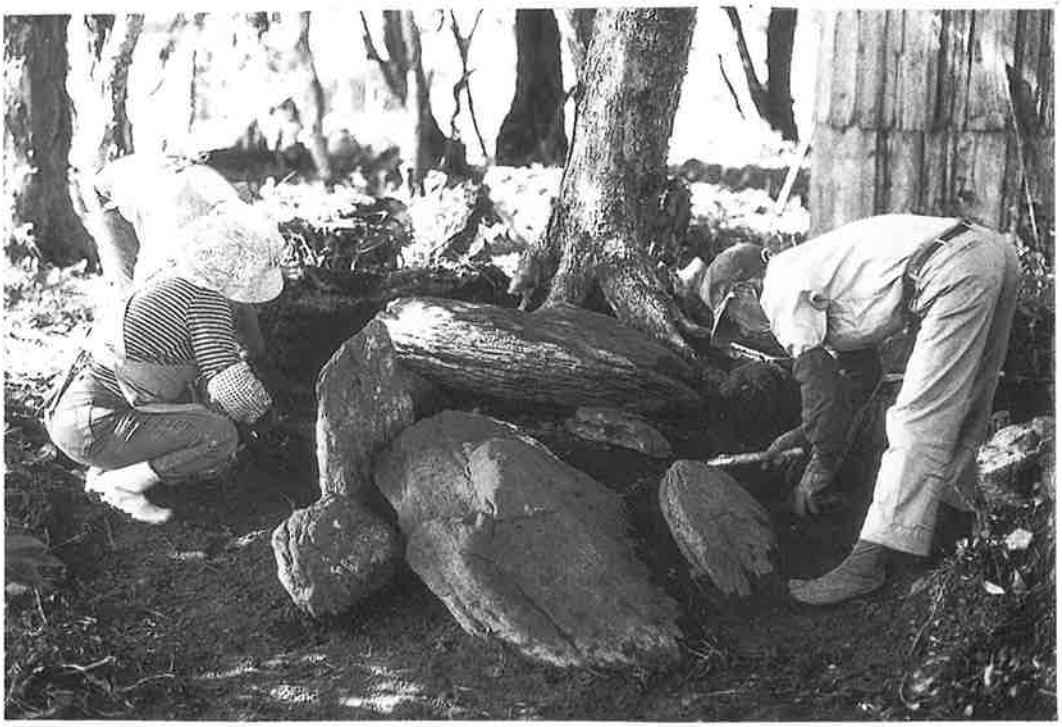
PL. 25　小嶋遺跡出土土器

PL. 26　小嶋遺跡出土石器

PL. 27　小嶋遺跡出土石器

PL. 28　小嶋遺跡出土須恵器

PL. 29　調査風景



PL. 30　調査風景

松浦市文化財調査報告書　第４集

小 嶋 古 墳 群

発 行　長崎県松浦市志佐町里免365番地
松浦市教育委員会
印 刷　長崎県佐世保市山祇町１９－１３
Ｓ　Ｋ　印　刷